

日本IT書紀

079 計算機 v s ソロバン

05 淹滞篇
卷之十一 地定

佃均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第七十九

計算機 vs ソロバン

一

終戦――。

戦いに負けたのでなく、戦いが終わったのだという、何とも無責任な表現によって始まった「戦後」の一月目、すなわち一九四五年の九月十五日、『日米會話手帖』が発刊された。奥付には著者として「加藤美生」の名があるが実際に執筆したのは板倉勝正、出版元は「科学教材社」とあるが実体は誠文堂新光社である。

創業者である小川菊松は一八八八年（明治二十一）に茨城県に生まれ、貧困のために高等小学校すら満足に卒業できなかつた。十四歳で上京し書店で丁稚奉公のち、一九一二年に書籍取次業として誠文堂を開業した。翌年から出版も手がけ、『商店界』や『子供の科学』といった雑誌で成功した。

四五年八月十五日正午に放送された玉音放送を、彼は出張先の房総岩井の駅舎で聞き、そのまま東京に向かう列車

に乗った。列車に揺られながら彼が考えたのは、

――これからは英語だ。

ということだった。

私は、八月十五日の頭に浮かんだヒントを早速実行に移し、拙速主義で『日米會話手帳』なるものを発行することにした。そこで『科学画報』の編集をやっていた加藤美生君に、何かこうした方向のもので、企画してみるように命じて、一夜で和文の原稿を作り、それに英訳を入れて、四六半截判の三十二頁という、実におそまつなものであるが『日米會話手帳』と銘打って発行することにした。

と小川は自著『出版興亡五十年』で語っている。

『日米會話手帳』は東京の書店に並ぶや初版三十万部を売り尽くし、地方の書店から注文が殺到した。ところが戦災で鉄道、道路が満足に動いていなかった。

加えて紙が不足していた。

このために小川は印刷の版の元となる紙型を郵送して、現地で印刷してもらうよりなかつた。そんなこんなでもあれ年末までに三百六十万部という大ベストセラーになった。

九月二十六日、中部太平洋カロリン諸島のメレヨン島

(ウォレアイ環礁)から千六百二十八人が別府港に戻ってきた。彼らを運んだのは連合艦隊附属の病院船だった「高砂丸」である。

メレヨン島は源田實の提案で建設された太平洋不沈空母の一つであつて、海軍第一航空艦隊の戦隊が駐屯し、四四年二月にアメリカ太平洋洋艦隊艦載機二百機の攻撃を受けて大きな被害が出た。ところがサイパン島を落としたアメリカ軍は、用なしになつたメレヨン島を放置した。

ガダルカナル島の戦いを境に、連合国軍は島々で氣勢を上げる日本の守備隊に構わず、一気にフィリピンから北上する方針に転換した。エレクソン作戦とダウンフォール作戦のことはすでに書いた。

そのために、以後一年半以上にわたつて、日本の将兵は南海に取り残された。一九四四年四月現在、メレヨン島の駐留していたのは陸海軍六千五百人だったが、本格的な戦闘を交えることがなかつた。

彼らはアメリカ戦闘機の機銃掃射に怯えつつ椰子の実を取り、カエルやヘビ、トカゲ、蛆などを奪い合うように貪り、「マサカリ」と呼ぶカボチャ——マサカリ(鉞)でやっつと割れるほど皮が硬い——を食べて生きながらえた。四千四百九十三人が餓死、病死した。

十月十一日には、早くも戦後初の映画『そよかぜ』が封

切られた。その主題歌「リングの歌」は、斬新なメロディと歌詞の覚えやすさがいまって大いに流行した。

二十九日には戦後初の宝籤が発売された。臨時資金調達法に基づき復興資金を確保するのがねらひだった。一枚十円で、くじに当たれば一等十万円、副賞はキャラコ二反、外れ券四枚で煙草十本と交換することができた。キャラコとは平織りの白木綿をいう。

四六年一月にはNHKラジオ放送で「のどじまん」がスタートし、四月になると朝日新聞の朝刊に長谷川町子の四コマ漫画「サザエさん」が始まった。

第二次大戦の空襲で、明治以来営々と築き上げてきた都市は、その建造物の半分が失われ、産業の生産能力は六割に低下していた。食糧難は戦前・戦中より激しさを増し、都市生活者は農村に行つて着物や家財を米に換えた。庶民はたくましく生きていた。

二

日本に進駐した連合国軍——主にアメリカの陸軍第八軍と空軍第二十軍——の兵士たちは、はじめは威圧的だった。本当は恐る恐る日本人と接していたのだが、そのうちに平和的かつ敗戦の民として侮蔑しつつ闊歩するようになった。

アメリカ兵がくると子どもたちは

「ギブミー」

を口々に叫んだ。

チヨコレートやキャンデー、チューインガムなどが、その頭上にはらまかれた。アジアの仏教的な意味での平等は、「遍く等しく」であつて、もしここに米が百粒あつて十人がそれを欲すれば各人に十粒ずつ分け与える。キリスト教的な平等は手に入れる機会を均等に与えるのである。

進んで売春を行う若い女性もいた。日本の政府が占領軍兵士のために「性的特殊慰安施設」の設置を指示したのは、ポツダム宣言受諾を正式に回答した四日後だった。公娼があれば私娼も許されるであろう。多くの女性たちは体を売る代償に、潤沢なアメリカの物資を手に入れ、それが飢えた家族にもたらされた。

この時期、「滋賀劣等」という言葉が流行ったことが、作家高見順の日記に見えている。

アメリカ兵がその乞食ならぬ乞食の群を、横目に見ながら、大股でやって来た。すると、青い労働者服を着た日本人が、つと傍に寄つて、

「ハロー、シガレット」。

ハローは Hellow である。シガレットはしかし Cigarette

ではない。その発音は実に不思議なものだった。シガは滋賀県の滋賀、レットは劣等の発音だ。ハロー、滋賀は劣等！ というのである。

「NO！」

とアメリカ兵は大きな手を振った。バカ——日本人だつたら、そう言つたらう。そういうた気持ちの込められた NO！ であつた。

嗚呼、なんとという日本人の下劣化だ。

駐留軍兵士の少なからずは、敗戦直後の日本人がボロをまとい垢にまみれているだけだったら、哀れに思ったとしても軽蔑はしなかった。彼らは誇りと矜持というものを大切に、境遇にかかわらずそれを持ち続ける人々を尊敬もした。ところが日本人の少なからずが物乞いの手を差し出した。

高見が憤慨したのはその部分だが、「滋賀劣等」というのはGHQが将兵に

「朝の挨拶は Ohio、何かしてもらったら Avigator と言え」

と教えたのとよく似ている。

兵士に簡単な日本語を教えるのに、アメリカ軍司令部はたいへんな苦勞をした。その理由はサイパン島攻略戦のと

きの出来事だった。

戦場に向かう輸送船の中で、アメリカ軍は陸戦隊の兵士に対して日本語を教育した。教育というより

「手を上げて出て来い」

の音を丸暗記させた。

しかし日本軍の兵士や軍属は徹底的に「米英鬼畜」「虜囚の辱めを受けず」を教え込まれていたために、アメリカ兵の片言の日本語を冷静に聞く余裕がなかった。

このために不幸が多発した。

言葉が通じてさえいれば、やせ細った敗残兵に引き金を引く必要もなかった。オハイオやアリゲーターは日本人に敵意のないことを示す苦肉の策だった。

一九四六年十月に埼玉県人間のアメリカ陸軍第三十九航空技術中隊に派遣されたピーター・カタニスという機械技術兵がいる。彼が故郷マサチューセッツ州クインシーの許婚者フローラに送った手紙に、面白い記録がある（『戦後史開封』、一九九五、産経新聞社）。

二十二歳の自動車修理工だった彼は、一九四五年の夏に徴兵され、テキサス州サンアントニオで一か月の基礎訓練を受けた。のち、ワシントン州フォート・ロートン港から輸送船で横浜に上陸し、埼玉県の入間航空基地で主力戦闘

機「P-51」の整備兵として軍役を勤めた。この時期、太平洋で戦った歴戦の部隊は役目を終えて次々に帰国し、代わりに新兵が日本に送り込まれていた。

その彼が四六年十一月十二日付で送った手紙に、「日本人の創意と工夫には、すっかり感心した」と書き記した。

それは木炭車と松根油だった。

木炭車を初めて見た彼は、

「アメリカのフォード社のV8型一九三三年モデル、三年モデル、四五年モデルなど古い型の車を改造し、後部につけたタンクで木炭を燃やし、その木炭に少し水をたらし生じる水蒸気を細いパイプでエンジンの方へ回している。なんと素晴らしい発想じゃないか」と感激した。

松根油の生産は四五年三月十六日の閣議決定「松根油等拡充増産対策措置要綱」によって国策となり、全国の山が掘り起こされていった。

戦略爆撃調査団の石油化学部が作成した「日本における戦時の石油」によると、その生産量は四一年が三万八千バレル、四三年が五万九千バレル、四四年は八万九千六百四十バレル、四五年は二十五万六千九百四十バレルだった。終戦時に日本が保有していた液体燃料の二〇・七％に相当

する。

報告書によると、人一人が一日従事して生産できる松根油は一・五リットルだった。日本の軍需省が計画していた一日当たり約二千キロリットルの粗油を生産するには、一日百二十五万人の労働力が必要だったが、終戦時に松根油の生産に従事していたのは四十三万四千人だった。

「米陸軍航空軍史」は次のように述べている。

日本軍は一九四五年度の初めには、こっけいな松根油計画をふくめ、人造石油工業を間に合わせに造るといふ絶望的な努力を行ったが、それはあまりにも遅すぎ、またあまりにも少なすぎた。

戦争が終わり、日本を占領してからアメリカ軍はそのことを知ったのではなかった。戦争の最中、彼らは日本のラジオ放送を傍受して、日本軍の石油不足が深刻な事態に陥っていることを知った。アメリカ空軍第二十軍の「航空情報レポート」一九四五年版には次のようにある。

「Dig and Steam and Send」(掘って蒸して送れ)は最近、日本で盛んに宣伝されている新しい歌のタイトルである。

これは最初は「Rum and Coca Cola」に対抗した歌のよう

にも聞こえるがそうではない。松の根——それは日本にとって石油の貴重な代替燃料であるが——を掘って処理して油を手に入れるために、かの不幸な国の大衆をさらに奮い立たせるために計画されたものである。日本はこれまでに石油の代替燃料生産について検討してきたが、松根油はこの長い道のりの一番新しい到達点である。

余談だが、松根油は戦後しばらくの間、生産が継続された。軍主導で建設された工場を民間企業が払い下げを受け、これを石油工場で精製して農業用発動機などに使用したのである。軍需産業がわずかに戦後の失業を救ったケースといえるかもしれない。

三

カタニス技術兵が許婚者フローラに送った手紙のもう一つには、計算機と十露盤(ソロバン)の対決があったことが記されている。東京・有楽町のアーニー・パイル劇場(東京宝塚劇場)でIBM製PCSと日本のソロバンのコンテストが行われた、という。

足し算から掛け算、割り算までどちらが早く、正確に答

えを出すか、だれが主催したコンテストか知らないが、競争なんだ。劇場にはG Iがいっぱい詰めかけ、息をのんでこの日米試合の成り行きを見つめていた。

僕自身を含めて米国側の観客はみな、米軍兵士が操る計算機が間違いなく勝つと思っていたのだが、実際にはなんと日本のソロバンが勝ってしまったので、びっくりした。負けた米側の兵士は罰としてソロバンの名手の日本人をリキシヤに乗せて、劇場の周りを一周することになった。

「リキシヤ」とは人力車のことである。

より正確にいうと、このコンテストは一九四六年の十一月十一日に行われた。アメリカ側の選手はGHQのトーマス・クッド二等兵（所属不明）、使用したのはIBM社の統計会計機械電動タイプ、日本の選手として「東京貯金支局の松崎喜雄」の名が伝えられている。

加減乗除の計算を三回行い、いずれも十露盤が勝った。負けたトーマス・クッド二等兵は約束通り松崎氏を人力車に乗せて劇場を一周した。

当時、アメリカ軍の将兵は東洋人全般を「グーク」、日本人を「ニップ」と蔑称していた。だが、このイベントを自分の目で見た兵士たちは、間違いなく日本人に対する認識を新たにした。

カタニス技術兵は次のように書き残している。

僕はこのコンテストを見て、それまで日本人に対して抱いていた優越感を改めなければいけない、と考えさせられた。もう日本人のことを内緒にグークなどとは呼んではいけないのだと思う。

ソロバンがPCSに、速度と正確さで勝った。事実、単純な加減乗除だけで競えば、PCSはその程度の性能しか出せなかったかもしれない。それというのは、PCSはカードをパンチし、配電盤のケーブルを設定しなければならぬ。

それを考えれば、五つ珠の上げ下げで計算を行うソロバンのほうが速い。だがアイテムが数百項目に及び、数量が大量にあつて一度に処理しなければならぬ場合、人手に頼っていたのではコストがかかりすぎる。つまり用途・目的が違うということだ。

実際、太平洋戦争のさなか、物資輸送を手配するために日本の陸軍は日本生命や第一生命が保有していたIBM社のPCSを使ったが、それは全体をまとめあげるためだけだった。そこに至るまでは、主要な都市と軍港の近くにソロバンの使い手を五十人以上集めて分類と集計の作業をし

た。人手でこなしたのだから、凄いとえば凄いな。

以上は戦後秘話的なエピソードのだが、本書は計算機を扱っている関係から、なぜGHQは千人以上の駐留アメリカ軍兵士の前でアメリカ製の計算機と日本人のソロバンを競わせたのか、ということを考える。

エンターテインメント的なイベントなら大相撲の横綱に土俵入りを披露させてもよかつたし、歌舞伎役者を登壇させてもよかつたではないか。

なぜ計算機 vs ソロバンだったのか。

駐留アメリカ軍の兵士たちは素直に日本人の計算能力——ひいては文化——を見直し、日本人は計算機のメリットを理解した。GHQはこのようなかたちで、情報処理を日本人に任せても安心なのだということを、本国および極東委員会にアピールしたかったのかもしれない。

~~~~~ 補注 ~~~~~

科学教材社 一九二五年創業の教材・模型販売会社。設立当初は実物幻灯式のエハガキ幻灯機や望遠鏡などを販売していた。一九二六年、誠文堂社長の小川菊松が事業を継承した。

加藤美生 かとう・よしお『科学画報』(誠文堂新光社)の編集者だった。加藤によると、東京・青梅在住の吉川英治のもとに原稿の依頼に行った帰路、立川駅で黒人の米兵が英語で会話しているのを見て、会社に戻って小川に「英会話の本をやりませんか」と提案したという。

『出版興亡五十年』 小川菊松／誠文堂新光社／一九五三。

映画『そよかぜ』 松竹。封切られたのは一九四五年十月十一日だった。劇場にオーケストラ部員として勤める三人の青年(上原謙、佐野周二、斉藤達雄)が、下宿屋の娘(並木路子)をめぐるて練り広げる恋の軌道を描いた。もとは戦時中の戦意高揚を目的に書かれた脚本だったが、舞台を街頭慰問隊から劇場に置き換えた。「リンゴの唄」は作曲・万城目正、作詞・サトウハチローで、撮影に間に合わずアフレコでつけられた。撮影で並木路子は「丘を越えて」を歌っていた。

長谷川町子 はせがわ・まちこ／1920～1992。佐賀県に生まれ、はじめ画家を目指したが山脇高等女子学園在学中に田河水泡の知己を得、弟子となった。四六年、旅先の浜辺を散歩していたときに、砂浜に打ち上げられた貝殻や海草を見て「磯野」家のアイデアを思いついた。福岡で発行されていた夕刊紙「フクニチ」に連載を始めたところ人気が出た。四九年朝日新聞夕刊に起

用されたため 主人公サザエさんをにわかに結婚・引退させることになった。

高見 順 たかみ・じゅん／1907～1965。本名は「高間芳雄」。福井県に生まれ中学校時代に白樺派に憧れて作家を志した。東京帝国大学に進み左翼芸術同盟に参加して機関誌「左翼芸術」などに作品を発表した。大学卒業後、コロムビア・レコードに入り、併せてプロレタリア作家として活動したが三二年治安維持法に違反した容疑で検挙された。三五年に発表した『故旧忘れ得べき』で第一回芥川賞候補となり、『如何なる星の下に』で作家の地位を獲得した。『高見順日記』は昭和史資料としての価値も持っている。

サイパン島上陸作戦のアメリカ海兵隊 オハイオ州出身の兵士が多かった。このため彼らが使った俄か仕立ての日本語はオハイオ訛りが強かった。

松根油 しょうこんゆ・樹齢四十年から五十年の松の根を鉄の釜に吊りいれて蒸す。十四時間から十五時間かけて釜内温度を三百五十度まで高めると松の根から油成分を含んだ蒸気が出る。この作業を乾溜と言った。乾溜された成分を冷却して得られた液体からタールと油成分を分離し、油成分を蒸留すると液体燃料が生成される。自動車用ガソリンの代替だけでなく、航空機の燃料などにも使われた。

ラム&コココーラ 当時アメリカで流行していた歌。唄ったのはアンドリュー・シスターズ、演奏はグレンミラー・オーケストラだった。

グーク book・語源は「国」を意味する朝鮮語で、一九四九年に勃発した朝鮮戦争に参加したアメリカ兵が本国に持ち帰ったとす

る説が一般的である。しかしこの言葉は第二次大戦前からアメリカで使われていた。どうやら十九世紀末にアメリカ西海岸に多くの朝鮮人が移民し鉄道工夫や洗濯、魚洗いなどに従事したとき、白人社会で付けられた蔑称であるらしい。少林寺拳法、テコンドー、空手といった武芸のイメージが合体し「東洋の小鬼」という意味も持つようになった。のちにベトナム戦争でもベトナム人に対してアメリカ兵はこの言葉を使った。

日本IT書紀 079 計算機 v s ソロバン

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。